2024 年 5 月 19 日　説教「真理の御霊が来ると」

ヨハネの福音書　16 章 7～13 節

今朝はペンテコステの礼拝です。従って、使徒の働きの学びはお休みして、聖霊降臨に関連して学びます。今朝はヨハネの福音書 16 章から聖霊の働きについてみていきましょう。

１．助け主（7～9 節）

①キリストが去ることは益（7）**「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。**

この聖書箇所はイエス･キリストが十字架につく直前を背景としています。ヨハネの福音書の 14～16 章には、御霊のことについて、キリストは頻繁に教えています。キリストは十字架上の死を目の前にして、「わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。」と言われました。しかし、弟子たちはまだピンと来ていませんでした。「去っていく」ということも「益です」ということも、あまり実感がなかったでしょう。

②助け主が遣わされ（7）**「それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。」**

キリストは、ご自身がこの地上から去って行く益について、以下のように述べます。即ち、ご自分が去られた後には、助け主が来られるというのです。助け主というのは、ギリシャ語ではパラクレートスというのですが、新共同訳では弁護者と訳されています。こちらだと、困ったときには間に入って弁護をしてくれるという要素がありますね。キリストは、さらに天に昇られた後に、助け主を遣わすと言われます。

③助け主が来ると（8）**「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」**

助け主である方が世に遣わされて来ると、助け主は世の人々に、三つのことについて、誤りを明らかにすると言われました。第一に罪について、第二には義について、第三にはさばきについて、世の誤りを明らかにすると言われました。

２．罪、義、さばきについて（10～12 節）

①罪について(9)**「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。」**

キリストはある面では、罪を教えるために来られました。罪の根本はキリストを信じないことです。ここに世の誤りがあります。キリストは罪からの救い主であることを聖霊は明らかにして下さいます。ですから、罪に気がつき、キリストに心を向けることは聖霊の働きなのです。

②義と裁きについて（10～11）**「また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたはもはやわたしを見なくなるからです。さばきについてとは、この世を支配する者が裁かれたからです。」**

次に義についてです。世は、正しいことを行うことで、義と認められると勘違いします。しかしそれは誤りです。不義なる者が恵みにより、キリストの十字架の贖いを信じることによって義とされるのです。つまり、キリストは十字架上で死に、三日目に復活し、昇天しました。キリストは地上では見えなくなりました。しかし、聖霊が来ると、その働きによって、義は明らかにされていくのです。また、さばきについてとは、神に対立する世の支配者の元締めであるサタンが裁かれることです。キリストは十字架で死ぬことで敗退したと世は間違えます。しかし、復活されたことで、人間には罪と死から解放される道が開かれました。それはまさに勝利でした。聖霊は降臨して、それを明らかにしてくれるのです。

③話すことはたくさん（12）**「わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。」**

主イエスは十字架を目の前にしながら、多くのことを教えられました。しかし、まだ話すことはたくさんありました。しかし、弟子たちがそれれを吸収し、理解し受け入れる力はないと言われました。

3.（13～15 節）

①真理の御霊（13）**「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたすべてを真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」**

聖霊の主たる働きは、福音の真理を明かにすることです。今ここでは御霊について真理の御霊と冠せられているのはそれを示しています。そして、その真理の御霊が来られるとありますが、これはキリストの昇天後に聖霊が降臨することによって、弟子たちはそれを確認することになります。御霊は来られて真理を明らかにしてくださいます。

②御霊は栄光を（14）**「御霊はわたしの栄光を現します。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。」**

御霊は神ご自身ですから、キリストの昇天後にこられて、神であるキリストの栄光を現すことになるのです。御霊はキリストのご本質をそのまま受けて、主を信じる者たちに教えてくださるのです。

③御霊はキリストのものを受け 15）**「父が持っておられるものはみな、わたしのものです。ですからわたしは、御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに知らせると言ったのです。」**

この節には、私たちの信じる主が、三位一体なる神であることが証しされています。「父が持っておられるものはみな、わたしのものです」という部分には、父なる神と子なる神（キリスト）とが同質だと証されています。また、「御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに知らせる」には、御霊なる神が、子なる神（キリスト）のものをそのまま受けて、私達に証するというのです。

《結論》

本日は、ペンテコステ（聖霊降臨日）です。ご一緒に、この日を覚えることができて感謝いたします。

ペンテコステの日に、福音書を開く**のは久しぶりのことで**す。しかし、イエス・キリストが聖霊降臨の出来事を預言的に語っておられる記事を読み、その重要性を確認していいましょう。キリストは聖霊の働きについて、明確に語って下さっているからです。

今朝の聖書箇所には、真理の御霊が来ると、私たちは真理へと導かれるとあります。そして、御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに話す」（13）とあって、表面だけを読むと御霊というのは主体性がないのかなと思ってしまいます。しかし、それは違いす。14 節を見ると、「御霊わたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。」とあります。つまり、御霊なるかたは、イエス・キリストの代弁者なのです。7 節では「助け主」と伝えられています。

ヨハネの福音書 3 章を見ると、そこにはニコデモという老年のユダヤ人指導者がイエスさまから、「新しく生まれる」ことについて教えられています。そして、御霊によって生まれることをも教えてもらっています。ニコデモは何のことを言われているのかわからなくなります。そこで、主イエスは御霊とは風のようなものだとたとえられました。「風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかは知らない、御霊によって生まれる者はみな、そのとおりです。」（8 節）とある通りです。つまり、御霊とは私たちに確かに働きかけられるが、風のようで、吹いているのはわかるけれど、見る事はできない方なのです。しかし、確かにその風がその人のうちに吹くとその人は新しくうまれさせられるというのです。ニコデモもそのときにはわかりませんでしたが、後にクリスチャンになりました。新しく生まれたのです。

私自身が来し方を振り返ってみますと、どうしてこの信仰を保ってこられたかといえば、やはりイエス・キリストというお方です。この方は信頼に足りる。この方のお言葉、御人格、なさった事、どこをとっても「主」なる方なのです。パウロは「自分にとって生きることはキリスト」と告白しました。それはパウロが特別なのではありません。私を含めて、クリスチャンはこの方ならついていけると受け取っているのです。キリストのなかに救いを見いだしてきているのです。皆さんも考えてみてください。どうでしょう。クリスチャンであるあなたは、イエス・キリストというお方に真理を見いだしてきたのではありませんか。そして、それは、真理の御霊が風のようにとりなして教え導いてくれていたのです。御霊はあなたが知らないうちに、キリストへと導いてくれていたのです。私も真理の御霊がずっと導いてくださっていたのかと確信しました。

今朝私たちは真理の御霊は来られて、私たちにイエス・キリストを示してくださることを学びました。このペンテコステの日にキリストに導いてくださる、御霊なる神に呼びかけていきましょう。罪を示し、福音を知り、力、いやし、平安、喜びを与え、歩みを導いてださるよう祈っていましょう。